

## 苦勞の伴う行動選択と成功体験・属性の関係

後藤希萌<sup>1</sup> 池野大翔<sup>2</sup> 伊東涼哉<sup>3</sup> 迫龍之介<sup>4</sup>

### 要約

本研究では「通常の効用を得る行動 A」と「最初は苦勞が伴い効用が少ないが、最後までその行動を行うことで A を超える効用を得ることができる行動 B」という二つの行動の存在を仮定し、この二つの行動のどちらかを選択するという状況を想定する。このとき、選択に影響を与える要因として

「過去の成功体験」「個人の属性」の二つの要因を考え、「過去の成功体験が多い人は行動 B を選びやすく、成功体験が多い時期によって行動選択への寄与度が変化する。」、「我慢志向属性の人は選択肢 B を選びやすい」、「順応性属性の人は選択肢 B を選びやすい」、「現在志向属性の人は A の行動を選びやすい」という仮説を立て検証した。Google form を用いた調査の結果、個人の属性に関しては有意な平均値差がみられたが成功体験では有意な平均値差を得ることができなかった。しかし分析から成功体験の時期によっては行動選択に影響を与える可能性が示された。

JEL 分類番号：D91, D15

キーワード：行動選択, 時間性

---

<sup>1</sup> 同志社大学経済学部経済学科 学部生 cgeg0100@mail3.doshisha.ac.jp

<sup>2</sup> 同志社大学経済学部経済学科 学部生 cgeg0204@mail3.doshisha.ac.jp

<sup>3</sup> 同志社大学経済学部経済学科 学部生 cgeg0244@mail3.doshisha.ac.jp

<sup>4</sup> 同志社大学経済学部経済学科 学部生 cgeg0658@mail3.doshisha.ac.jp

## 1. イントロダクション

本稿では、『やらない後悔』に着目して研究を行った。本来の経済学が想定するホモ・エコノミクスは常に合理的に行動するが、実際には常に合理的に行動することは非常に難しいことである。私たちはやった方が良いとわかっているにもかかわらず後悔するという非合理的な行動をとることがしばしばある。『やらない後悔』はどのようなメカニズムによって引き起こされるのか、またどのような属性の人間が『やらない後悔』の少ない人生を送っていきけるのか考察していく。

## 2. 研究仮説

### 2.1. 仮定.

今回の研究では「通常通り効用を得ることができる行動 A」と「最初は苦勞が伴い効用が少ないが、最後には A よりも高い効用を得ることができる行動 B」の存在を仮定する。

室岡（2023）の研究によると、行動 B の例であるダイエットは効用がない行動として議論しているため、今回の仮定とは異なるものといえる。

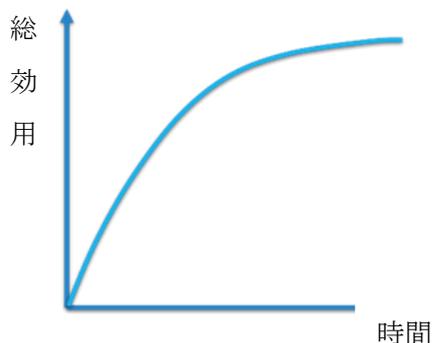


図1 行動 A

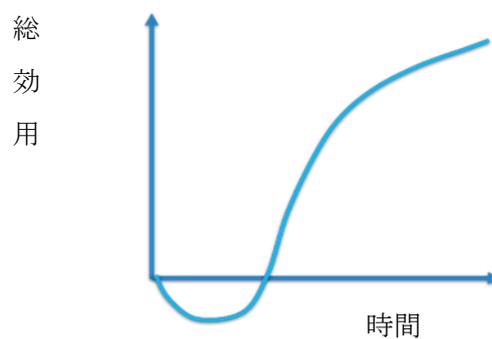


図2 行動 B

登山を例にとると、行動 A はロープウェイで山頂よりも低い地点まで向かい、そこで景色を見るという行動。行動 B は徒歩で山頂まで登り、山頂からの景色を見るという行動を設定する。このように行動 B は、苦勞を伴い、後に達成感のあるような行動を想定している。

### 2.2. 仮説

2つの選択肢 A、B があった時に、最終的な効用では B の方が高いにも関わらず、B の負の効用だけを見て、A の選択肢を選択してしまうことがある。そしてその選択には、過去の成功体験と我慢強さ、順応、現在思考という属性の二つの要因が関与してい

ると推測した。

本調査では、まず初めに「過去に成功体験が多いか」と「その成功体験は小学校・中学校・高校・大学・社会人のどの期間に多かったのか」という調査を行った。この調査では、成功体験が行動選択に関与するのか。また、どの年代の成功体験が行動選択に対しより大きな関与をするのかを明らかにすることを目的とした。

次に、性格が行動選択に関与していると予想し、「我慢強さ・順応性・現在思考」の3つの属性が行動選択に関与しているかを調査した。以上の点から、本調査では以下の仮説を示すことを目的とする。

『成功体験が多い人間は A よりも B の選択肢を取りやすくなる』、『成功体験が多い時期によって行動選択への寄与度が変化する。』

『我慢強さ・順応性・現在思考の3つの属性のうち、我慢強さと順応性は B の選択肢を取りやすくするが、現在思考は A の選択肢を取りやすくする。』

### 3. アンケート調査

アンケートを google form で作成し、Instagram、LINE などの SNS を用いて拡散して回答を集めた。調査対象は 10 代から 80 代以上、9/3(日)~9/11(月)の回答期間において 84 件の回答を得た。アンケート内容については、冒頭で年齢、性別、職業を尋ねた。4~9 問目の質問は回答者の成功体験の有無を調査する質問であり、5 問目以外「はい」と「いいえ」の2段階の回答を用意した。5 問目のみ「多くある」、「やや多くある」、「やや少ない」、「少ないまたは全くない」の4段階の回答を用意した。10~19 問目の質問は回答者を「我慢強さ」、「順応性」、「現在思考」の3つの属性に分類する質問である。10~18 問目質問については「当てはまる」、「やや当てはまる」、「どちらとも言えない」、「やや当てはまらない」、「当てはまらない」の5段階の尺度による回答を用意した。19 問目の質問においては、回答者自身がどの属性であるかを問う。10~18 問目の質問で3つの属性に分類不可能であった場合、19 問目の答えを回答者の属性とするためである。「我慢強い」、「適応力が強い」、「今を大事にする」の3つの回答を用意した。20~46 問目の質問においては、最終的な効用では B の方が高いにも関わらず、B の負の効用だけを見て、A の選択肢を選択することの多い状況の例を3つあげ、27 問の質問をした。

状況 1 山登り (2000m級, AとBのツアーがあり費用は同じ)

行動 A は、ロープウェイで7合目まで登り、B に劣る景色を見る。

行動 B は、6時間かけて山頂まで登り、絶景を見る。

状況2 掃除（3時間掃除をすると1か月間快適に暮らせる）

行動Aは、掃除をしないで、好きなテレビ番組やYouTubeなどを見る。

行動Bは、掃除をして、部屋をきれいにする。

状況3 ダイエット（目標は今の体重の-5kg）

行動Aは、ケーキなどを好きな時に食べることができるが、ダイエットは成功しない。

行動Bは、ケーキなどを我慢し、ダイエットに成功する。

まず、上記のような状況それぞれで選択肢A、選択肢Bのどちらを選択するかを問い、選択肢A、選択肢Bの2つの回答を用意した。また、選択肢A、選択肢Bにおける、それぞれの途中と完了後の効用を問い、-5から5で効用を表す11段階の尺度による回答を用意した。そして、実際に与えられた例のような状況の経験の有無を問い、「ある」と「ない」の2択の回答を用意した。そして「ある」を選択した回答者には実際の経験とアンケートの質問で同じ選択を問い、「はい」と「いいえ」の2択の回答を用意した。

#### 4. 分析

##### 4.1 アンケート結果

アンケートを集計し、成功体験の有無と状況1で得る効用をまとめた結果次のようなデータが得られた。

成功体験	A途中	A最終	B途中	B最終
なし	3.55	3.65	0.19	4.81
あり	3.62	3.75	0.81	4.63
合計	3.58	3.69	0.54	4.71

表1 行動1で得る効用の平均

この結果から、Aの途中と最終ではほとんど同じ効用が得られ、Bの途中では効用が極端に低く、Bの最終地点でAの最終よりも大きな効用が得られることが確認できた。このことから、今回の研究で仮定した行動Aと行動Bの両方の存在を理論的に実証できた。続いて、状況1において今回のアンケートで選択した行動と、実際の生活で同じような経験をした人の数を集計すると実際にはAの選択をした人でアンケートでもAを選んだ人が10人、アンケートではBを選んだ人が2人。実際の行動はBでアンケートではAを選択した人が0人アンケートでもBを選んだ人は10人という結果になった。

実際に同じような経験をした人がいて、実際の行動とも一致することから、今回の想定している行動Aと行動B両方の存在が確認できた。

次に成功体験の有無が行動の選択に影響を与えているかを調べるため、石村（2003）の研究によると、成功体験の有無とどちらの選択肢をとったかのクロス集計を行った。その結果、行動1、行動3では過去の成功体験によって選択肢Bを選びやすくなっているという可能性が示されたため、実際に有意な差が存在するか検定を行っていく。

#### 4, 2 分析

まず過去の成功体験の有無による行動A、Bの選択に有意差があるか「過去の成功体験は行動選択に影響を与えない」という帰無仮説を立て、 $\chi^2$  検定を行った。この時の従属変数は、行動選択である。その結果、状況1では有意確率は0.284 状況2では0.596 状況3では0.641 となったため有意差を確認することはできなかった。そのため「成功体験がある人ほど行動Bを選択しやすい」という仮説を立証することはできなかった。次に成功体験の時期によって行動選択に影響を与えるかを小・中学生、高校、大学、就職後の時期に分けて同じようにそれぞれ $\chi^2$  検定を行った。その結果高校と大学の成功体験と行動1の選択に有意差がそれぞれ0.014、0.042と確認できたため、「高校と大学の成功体験が状況1での行動選択に影響を与える」という結果を得ることができた。小・中学校の成功体験では有意な平均値差は得られなかった。しかし、有意な平均値差が得られた高校・大学の成功体験と状況1のA、Bの選択の度数を集計すると高校で成功体験がない人は状況1で選択肢Aを選んだ人が24人で選択肢Bを選んだ人が19人。成功体験をした人で選択肢Aを選んだ人は12人で選択肢Bを選んだ人は29人となった。大学の成功体験でも同様に成功体験がない人は選択肢Aを選びやすく、成功体験がある人は選択肢Bを選びやすいという結果となった。部活動や受験勉強など成功体験を得るまでに相応の努力を必要とした体験が行動に影響を与えると考察する。また今回の調査では主に大学生のアンケートの回答が集まったため自身の記憶に残る成功体験が影響しているとも考察できる。

属性では我慢強さ・順応・現在志向の三タイプを用意したが我慢強さと順応には正の相関がみられたためこの二つの属性は近しいものであるとして分析していく。まず、属性ごとの行動選択をクロス集計表にまとめた。

	状況1A	状況1B	状況2A	状況2B	状況3A	状況3B
我慢強い	29.70%	70.30%	25%	75%	42.90%	57.10%
順応性	40.70%	59.30%	26.00%	74.00%	48.10%	51.90%
現在志向	48.30%	51.70%	51.70%	48.30%	75.90%	24.10%
全体	42.90%	57.10%	34.50%	65.50%	56%	44%

## 表 2 属性と行動選択のクロス集計表

以上の結果から、「我慢強さ・順応性属性の人は選択肢 B を選びやすい」「現在志向属性の人は選択肢 A を選びやすい」という可能性が示された。次に、行動選択と属性のクロス集計表を作り、 $\chi^2$  検定を行った結果、状況 3 では有意水準が 0.026、状況 2 では有意に近い 0.055 と確認できた。

また、属性ごとに効用の大きさが異なる可能性も示されたので「属性ごとに行動 A、B の効用に差がない」という帰無仮説についても検証した。母集団はそれぞれの状況で選択した行動 A と B に分けた。石村の研究によると、要因は属性、従属変数は、行動 A、B の最終効用から途中効用を引いた効用差で一要因分散分析を行った。しかし、どれも有意な結果は得られなかったため、属性は効用の大きさには影響を与えないことが示された。

## 5. 結論

この論文では、仮定した選択肢 A と B の存在を示し、成功体験の影響について議論した。成功体験が行動 B の選択に与える影響について確認できなかったが、高校と大学の成功体験が影響を持つことが示された。また、小中学での成功体験は影響を与えない傾向があったことから、部活や受験などより努力が必要な体験が影響を持つ可能性が考えられる。属性に関しては我慢強さと順応性には正の相関があった。属性は状況によって行動に影響を与えることが分かったが、どの属性が最も影響を持つかはさらに分析が必要であるといえる。今後の課題は成功体験の時期による影響を分析し、幅広い年齢層からアンケートを収集し、仮説を検証することである。また、属性の影響も詳細に検証が必要である。

## 引用文献

室岡健志,2023,行動経済学,日本評論社,日本

石村・加藤・劉,2003,SPSS でやさしく学ぶアンケート処理,石村監修,東京図書,日本

石村光資郎,2021,SPSS による分散分析・混合モデル・多重比較の手順,石村監修,東京図書,日本